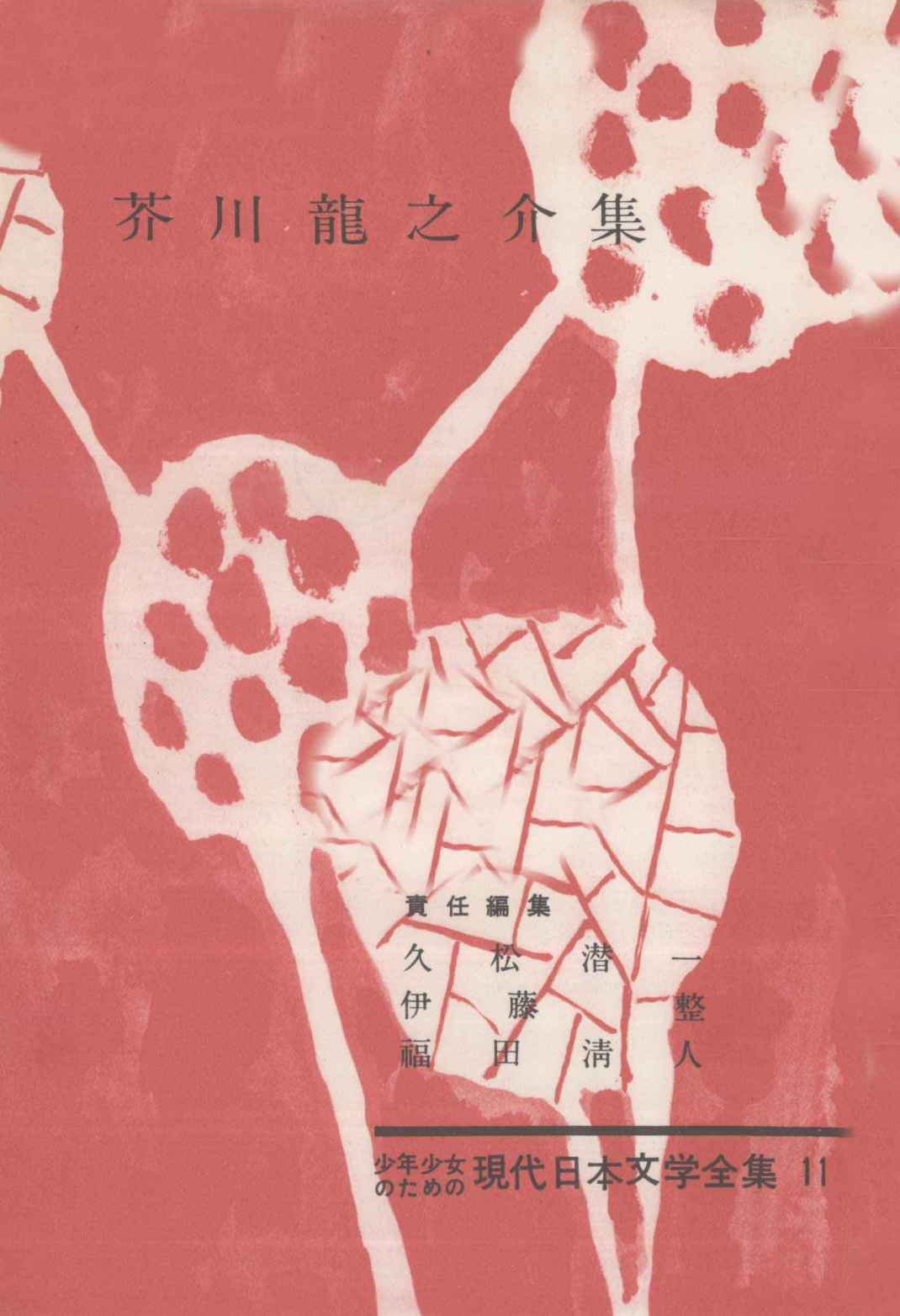


少年少女のための

11

現代日本文学全集



芥川龍之介集

責任編集

久伊福

松藤田

潜清

一整人

少年少女のための現代日本文学全集 11

NDC 918.6

少年少女のための

現代日本文学全集11

芥川龍之介集

定価 二五〇円

昭和三十年六月一日 初版発行

昭和三十一年十月二十三日 再版発行

発行者 小嶺嘉太郎

発行所 東京丸ビル 東西文明社

営業所 千代田区神田神保町二ノ二一

印刷 東京印刷株式会社
製本 堀和製本所

この本を読む人に

すぐれた文学者は、この世や人間の真実や、美をするどくみつめて、その作品にはつきりとえがいてくれています。私たちは、それを読むことによって、私たちの心をゆたかに、美しくすることが出来ます。

この本には、そうしたすぐれた作家たちの代表的な作品のなから、さらに少年少女のみなさんが、読むのにふさわしいもの、ぜひ読んでもらいたいものを、えらんでのせてあります。そして学校で教わらないむずかしい漢字は、かぎに改めたり、その意味をしるしたり、またかなづかいも、現代かなづかいになおして、みなさんにしらしみやすいようにしてあります。

その作品も作家のいろいろな面を示すようにしてありますが、あまりに長すぎて、この本のせきれない作品や、もつとおとなになつてから読んだほうがいい部分をよくむものは、その一部をとつてのせてあるものもあります。その部分のとりかたもくふうして、その作品のあらましを知られるようにつとめました。

しかし、もちろん原作をこのように改めたといつても、原作の意図およびそ

の味わいなどは、できるかぎり、そこなうことなく伝えることができるよう苦心しました。だから実際は、このまゝを原作と考えても、さしつかえがないと思つております。

最後に、解説として、その作家の一生や、その作品の説明がつけられております。一つの作品をよく味わうには、それがどのような作家によつて書かれたか、その作家の一生、ひととなりを知ることが、きわめてたいせつであります。それで初めに、解説のほうを読んでから作品のほうを読むことも、作品をよく理解することができる方法でしょう。

この解説も、それを書いた人々が、たいへん興味ふかく、群はしるしてくれておりますのできつと、作品を読むように、みなさんの心をひきつけてくれるであらう。

編集者

久松 潜 一

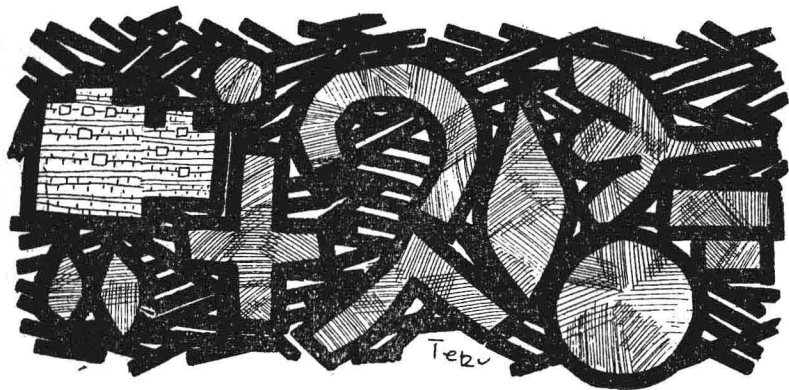
伊 藤 整

福 田 清 人

* 本文中、唐(中国の名)のように、かっこの中に小活字で入れてあるのは、編集部でつけた注です。

芥川龍之介集 もくじ

芋 いも	鼻 はな	羅生門 らせいもん	白 しろ	三つの宝 みつのたから	アグニの神 あぐにのかみ	蜘蛛の糸 くぐつゐのいと	杜子春 としゆん
粥 がゆ							
.....							
.....							
.....							
.....							
.....							
.....							
.....							
.....							
三	五	五七	四七	三六	二四	二〇	七



竜 りゅう 九二

トロツコ 一〇四

報恩記 ほうおんき 二〇

雛 ひな 二九

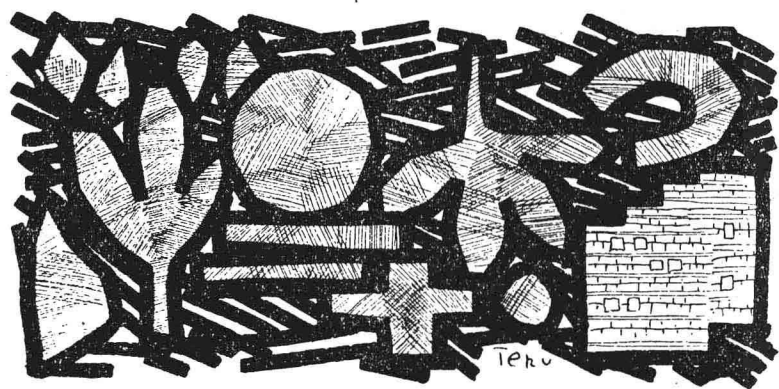
一塊の土 いっかたのつち 一四四

地獄変 じごくへん 一五六

きりしとほろ上人伝 しやうてんでん 一九二

解説 かいせつ 高木卓 たかぎ たく 二〇五

そうてい 青山龍水
カット 山本耀也



芥川龍之介集

杜子春

一

ある春の日ぐれです。

唐(中国の名)の都、洛陽(らくやう)の西の門の下に、ぼんやり空を

あおいでいる、ひとりのわか者がありました。

わか者は名は杜子春(としゆん)といって、もとは金持のむすこでしたが、今は財産を使いつくして、その日のくらしにもこまるくらい、あわれな身分になっているのです。

なにしろそのころ洛陽(らくやう)といえは、天下にならぶものがない、はんじょうをきわめた都ですから、往来にはまだしっきりなく、人や車が通っていました。門いっぱいに当たっている、油(あぶら)のような夕日の光の中に、老人のかぶった紗(しゃ)のぼうしや、トルコの女の金の耳輪(みみわ)や、白馬にかざった色糸(いろいと)のたすなが、絶えず流れていく様子は、まる

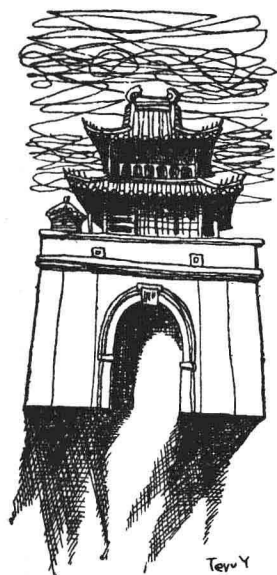
で絵のような美しさです。

しかし杜子春(としゆん)はあいかわらず、門のかべに身を寄せて、ぼんやり空ばかりながめていました。空には、もう細い月が、うらうらとなびいた霞(かすみ)の中に、まるで爪(つめ)のあとかと思うほど、かすかに白くうかんでいるのです。

「日はくれるし、腹(はら)は減るし、その上もうどこへ行っても、とめてくれる所はなさそうだし——こんな思いをして生きていくくらいなら、いっそ川へでも身を投げて、死んでしまったほうがましかもしれない。」

杜子春(としゆん)はひとりさっきから、こんなとりとめもないことを思いめぐらしていたのです。

すると、どこからやってきたか、とつぜんかれの前へ



足を止めた、かた目すがめの老人があります。それが夕日の光をあびて、大きなかげを門へ落すと、じっと杜子春の顔を見ながら、

「おまえは何を考えているのだ。」と、おうへいにことばをかけました。

「私ですか。私は今夜ねる所もないので、どうしたものかと考えているのです。」

老人のたずね方が急でしたから、杜子春はさすがに目をふせて、思わず正直な答をしました。

「そうか。それはかわいそうだな。」

老人は、しばらく何事か考えているようでしたが、やがて、往來にさしている夕日の光を指さしながら、

「ではおれがよいことを一つ教えてやろう。今この夕日の中に立って、おまえのかげが地にうつたら、その頭に当たる所を夜中にほってみるがよい。きっと車に一ぱいの黄金がうまっているはずだから。」

「ほんとうですか。」

杜子春はおどろいて、ふせていた目をあげました。ところからさらにふしぎなことには、あの老人はどこへ行っ

たか、もうあたりにはそれらしい、かげも形も見当たりません。そのかわり空の月の色は前よりもなお白くなって、休まない往來の人通りの上には、もう気の早いころ、もりが二三びきひらまっています。

二

杜子春は一日のうちに、洛陽の都でもただひとりという大金持になりました。あの老人のことばどおり、夕日にかげをうつしてみて、その頭に当たる所を、夜中にそっとほってみたら、大きな車にも余るくらい、黄金が一出でてきたのです。

大金持になった杜子春は、すぐりっぱな家を買って、玄宗皇帝にも負けないくらい、ぜいたくなくらしをしはじめました。蘭陵の酒を買わせるやら、桂州の竜眼肉をとりよせるやら、日に四度色の変わるばたんを庭に植えさせるやら、白くじやくを何ばも放しがいにするやら、玉を集めるやら、錦をぬわせるやら、香木の車を造らせるやら、ぞうげのいすをあつらえるやら、そのぜいたくをいちいち書いていては、いつになってもこの話がおし

まいにならないくらいです。

すると、こういうわさを聞いて、今までは道で行き合っても、あいさつさえしなかった友だちなどが、朝夕遊びにやってきました。それも一日ごとに数が増して、半年ばかりたつうちには、洛陽の都に名を知られた才子や美人が多い中で、杜子春の家へ来ないものは、ひとりもないくらいになってしまったのです。杜子春はこのお客たちを相手に、毎日酒もりを開きました。その酒もりのまたさかんなことは、なかなか口にはつくされません。ごくかいつまんだだけをお話しても、杜子春が金のさかずきに西洋から来たぶどう酒をくんで、天竺生まれの魔法使が、刀を飲んで見せる芸に見とれていると、そのまわりには二十人の女たちが、十人はひすいのはすの花を、十人はめのうのぼたんの花を、いずれも髪にかざりながら、笛や琴を節おもしろく奏しているというけしきなのです。

しかしいくら大金持でも、お金には際限がありますから、さすがにぜいたく家の杜子春も、一年二年とたつうちに、だんだんびんぼうになりだしました。そうする

と人間は薄情なもので、きのうまでは毎日来た友だちも、きょうは門の前を通ってさえ、あいさつ一つして行きません。ましてとうとう三年めの春、また杜子春が以前のとおり、一文無しになってみると、広い洛陽の都の中にも、かれに宿を貸そうという家は、一けんもなくなってしまうしました。いや、宿を貸すどころか、今では椀に一杯いの水も、めぐんでくれるものはないのです。

そこでかれはある日の夕方、もう一度あの洛陽の西の門の下へ行って、ぼんやり空をながめながら、とほうにくれて立っていました。するとやはりむかしのように、かた目すがめの老人が、どこからかすがたを現わして、「おまえは何を考えているのだ。」と、声をかけるではありませんか。

杜子春は老人の顔を見ると、はすかしそうに下を向いたまま、しばらくは返事もしませんでした。が、老人はその日も親切そうに、同じことばをくり返しますから、こちらも前と同じように、「私は今夜ねる所もないので、どうしたものかと考えているのです。」と、おそろおそろ返事をしました。

「そうか。それはかわいそうだな。ではおれがよいことを一つ教えてやろう。今この夕日の中へ立って、おまえのかげが地にうつたら、その胸に当たる所を、夜中にほってみるがよい。きっと車に一ぱいの黄金がうまっているはずだから。」

老人はこう言ったと思うと、こんどもまた人ごみの中へ、かき消すようにかくれてしまいました。

杜子春はその翌日から、たちまち天下第一の大金持に返りました。と同時にあいかわらず、しほうだいなぜいたくをはじめました。庭にさいているぼたんの花、その中にねむっている白くじやく、それから刀を飲んで見せる、天竺から来た魔法使——すべてがむかしのとおりなのです。

ですから車に一ぱいあった、あのおびただしい黄金も、また三年ばかりたつうちには、すっかりなくなっていました。

三

「おまえは何を考えているのだ。」

かた目すがめの老人は、三度杜子春の前へ来て、同じことを問いかけました。もちろんかれはそのときも、洛陽の西の門の下に、ほそぼそと霞を破っている三日月の光をながめながら、ぼんやりたたずんでいたのです。

「私ですか。私は今夜ねる所もないので、どうしようかと思っていますのです。」

「そうか。それはかわいそうだな。ではおれがよいことを教えてやろう。今この夕日の中へ立って、おまえのかげが地にうつたら、その腹に当たる所を、夜中にほってみるがよい。きっと車に一ぱいの——」

老人がここまで言いかけると、杜子春は急に手をあげて、そのことばをさえぎりました。

「いや、お金はもういらなのです。」

「金はもういらない？ ははあ、ではぜいたくをするにはとうとうあきてしまったと見えるな。」

老人はいぶかしそうな目つきをしながら、じっと杜子春の顔を見つめました。

「なに、ぜいたくにあきたのじゃありません。人間というものにあいそがつきたのです。」

杜子春は不平そうな顔をしながら、つっけんどんにこう言いました。

「それはおもしろいな。どうしてまた人間にあいそがつきたのだ？」

「人間はみな薄情です。私が大金持になったときには、世辞も追従もしますけれど、いったんびんぼうになってごらんなさい。やさしい顔さえもして見せはしません。そんなことを考えると、たとえもう一度大金持になったところが、なんにもならないような気がするのです。」

老人は杜子春のことを聞くと、急ににやにやわらいだしました。

「そうか。いや、おまえはわかい者に似合わず、感心に物のわかる男だ。ではこれからばいばうをしても、安らかにくらししていくつもりか。」

杜子春はちよいとためらいました。が、すぐに思いきった目をあげると、うったえるように老人の顔を見ながら、

「それも今の私にはできません。ですから私はあなたのでしになって、仙術の修業をしたいと思うのです。いい

え、かくしてはいけません。あなたは道德の高い仙人でしょう。仙人でなければ、一夜のうちに私を天下第一の大金持にすることはできないはずです。どうか私の先生になって、ふしぎな仙術を教えてください。」

老人はまゆをひそめたまま、しばらくはだまって、何事か考えているようでしたが、やがてまたにっこりわらいながら、

「いかにもおれは峨眉山に住んでいる、鉄冠子という仙人だ。はじめおまえの顔を見たとき、どこか物わかりがよさそうだったから、二度まで大金持にしてやったのだが、それほど仙人になりたければ、おれのでしにとりたててやろう。」と、快く願いをいれてくれました。

杜子春は喜んだの、喜ばないのではありません。老人のことがまだ終わらないうちに、かれは大地にひたいをつけて、何度も鉄冠子におじぎをしました。

「いや、そうお礼などは言ってもらうまい。いくらおれのでしにしたところで、りっぱな仙人になれるかなれないかは、おまえしだいできまることだからな。——が、ともかくもまずおれといっしょに、峨眉山のおくへ来て

みるがいい。おお、さいわい、ここに竹杖ちくじょうが一本落ちて
いる。ではさっそくこれへ乗って、一飛びに空をわたる
としよう。」

鉄冠てつかん子こはそこにあった青竹を一本拾い上げると、口
中に呪文じゅもんをとえながら、杜子春としゅんといっしょにその竹へ、
馬にでも乗るようにまたがりました。するとふしぎでは
ありませんか。竹杖ちくじょうはたちまち竜りゅうのように、勢いよく大
空へまい上がつて、晴れわたった春の夕空を峨眉えび山さんの方
角へ飛んでいきました。

杜子春としゅんはきもをつぶしながら、おそろおそろ下を見お
ろしました。が、下にはただ青い山々が夕あかりの底に
見えるばかりで、あの洛陽らくようの都の西の門は、(とうに霞かすみ
にまぎれたのでしょう。)どこをさがしても見当たりま
せん。そのうちに鉄冠てつかん子こは、白いびんの毛を風にふかせ
て、高らかに歌をうたいだしました。

朝あしたに北海ほっかいに遊び、暮くれには蒼梧そうこ。

袖裏しゆりの青蛇せいだ、胆氣たんき粗そなり。

三たび嶽陽がくようにいれども、人識しらず。

郎吟ろうぎんして、飛過ひかす洞庭湖どうていこ。

四

ふたりを乗せた青竹は、まもなく峨眉えび山さんへまいおりま
した。

そこは深い谷に臨んだ、はばの広い一まい岩の上でし
た。よくよく高い所だと見えて、中空にたれた北斗ほくとうの星
が、茶わんほどの大きさに光っていました。もとより人
跡あとの絶えた山ですから、あたりはしんと静まりかえて、
やっと耳にはいるものは、うしろの絶壁ぜつぺきにはえている、
曲がりくねった一株のまつが、こうこうと夜風に鳴る音
だけです。

ふたりがこの岩の上に来ると、鉄冠てつかん子こは杜子春としゅんを絶壁ぜつぺき
の下にすわらせて、

「おれはこれから天上へ行って、西王母せいおうぼにお目にかかっ
てくるから、おまえはその間ここにすわって、おれの帰
るのを待っているがよい。たぶんおれがいなくなると、
いろいろな魔性ましやうが現われて、おまえをたぶらかそうとす
るだろうが、たとえどんなことが起るうとも、決して声
を出すのではないぞ。もしひとことでも口をきいたら、



一高（今の東大教養学部）
時代の著者

おまえはとうてい仙人にはなれないものだとかくをし
ろ。よいか。天地がさけても、だまっているのだぞ。」と
言いました。

「だいじょうぶです。決して声などは出しはしません。
命がなくなっても、だまっています。」

「そうか。それを聞いて、おれも安心した。ではおれは
行ってくるから。」

老人は杜子春に別れを告げると、またあの竹杖にまた
がって、夜目にもけすったような山々の空へ、一文字に
消えてしまいました。

杜子春はたったひとり、岩の上にすわったまま、静か
に星をながめていました。するとかれこれ半時ばかりた
って、深山の夜気がはだ寒くうすい着物にとおりだした
ころ、とつぜん空中に声があつて、

「そこにいるのは何者だ。」と、しかりつけるではあり
ませんか。

しかし杜子春は仙人の教えどおり、なんとも返事をし
ずにいきました。

ところがまたしばらくすると、やはり同じ声がひびい
て、

「返事をしないとたちどころに、命はないものとかくご
しろ。」と、いかめしくおどしつけるのです。

杜子春はもちろんだまっていました。

と、どこから登ってきたか、らんらんとまなこを光ら
せたところが一びき、忽然と岩の上におどりがって、杜
子春のすがたをにらみながら、一声高くたけりました。
のみならずそれと同時に、頭の上のまつ、のえだが、はげ
しくざわざわゆれたと思うと、後の絶壁のいただきから
は、四斗樽ほどの白蛇（白い）が一びき、ほのおのような舌

をはいて、見る見る近くへおりてくるのです。

杜子春はしかし平然と、まゆ毛も動かさずにすわっていました。

とらとへびとは、一つえじきをねらって、たがいにすきでもうかがうのか、しばらくはにらみ合いのていでしたが、やがてどちらが先ともなく、一時に杜子春に飛びかかりました。が、とらのきばにかまれるか、へびの舌に飲まれるか、杜子春の命はまたたくうちに、なくなってしまうと思ったとき、とらとへびとは霧のごとく、夜風とともに消えうせて、あとにはただ、絶壁のまつが、さっきのとおりこうこうとえだを鳴らしているばかりなのです。杜子春はほっと一息しながら、こんどはどんなことが起るか、心待ちに待っていました。

すると、一じんの風がふき起って、墨のような黒雲が一面にあたりをとさすやいなや、うすむらさきのいなす、まが、やにわにやみを二つにさいて、すさまじく雷が鳴りだしました。いや、雷ばかりではありません。それといっしょに滝のような雨も、いきなりどうどうとふりだしたのです。杜子春はこの天変の中に、おそれもなく

すわっていました。風の音、雨のしぶき、それから絶え間ないいなすまの光、——しばらくはさすがの峨眉山も、くつがえるかと思うくらいでしたが、そのうちに耳をもつんざくほど、大きな雷鳴がとどろいたと思うと、空にうすまいた黒雲の中から、まっかな一本の火柱が、杜子春の頭へ落ちかかりました。

杜子春は思わず耳をおさえて、一まい岩の上へひれふしました。が、すぐに目を開いて見ると、空は以前のとおり晴れわたって、向こうにそびえた山々の上にも、茶わんほどの北斗の星が、やはりきらきらかがやいています。してみれば今の大あらしも、あのとらや白蛇と同じように、鉄冠子のるすをつけこんだ、魔性のいたすらにちがいありません。杜子春はようやく安心して、ひたいのひやあせをぬぐいながら、また岩の上にすわりなおしました。

が、そのため息がまだ消えないうちに、こんどはかれのすわっている前へ、金のよろいを着くだした、身のたけ三丈もあるという、おごそかな神将が現われました。神将は手に三叉のほこを持っていましたが、いきなりそ